

日 本 ボ ス ト ン 会 会 報

発行所 日本ボストン会事務局

ご 挨拶

会長 長島 雅則

この度、日本ボストン会の会長の任を仰せつかりました。よろしくお願いいたします。

当会は創立 20 周年を超え、その活動も定着してきています。会員の皆様は米国のボストンに関わりを持った方々や、ボストンに興味のある方々です。その方々といろいろな活動を通して、人のネットワークを広げて行くことにより、我々の生活が豊かになるだろうと考えます。そのために微力ながら、お手伝いさせていただき所存です。

私のボストンとの関わりは、1974年にマサチューセッツ工科大学(MIT)の大学院に籍を置いた時に始まります。実際、生活をしてた場所は、ボストンからチャールス川を隔てたケンブリッジでした。当会の創立 20 周年を記念して製作されたホルダーの表紙を飾るボストンの景色は、まさしく MIT からいつも眺めていたボストンの街を思い起こさせる懐かしいものです。

私が初めて米国に着いたのは、ニューヨークでした。20代半ばの若者には、そこは、ある種の恐怖感を抱かせる騒々しい所でした。然しながらボストンにたどり着いた時、そこはニューヨークとは異なり落ち着いた雰囲気、ホッとした親しみを覚えた記憶があります。

MIT では大学院生および技術助手として 2 年半ほど CAD の勉強をいたしました。その後、英国で 5 年間、CAD の開発に携わります。その CAD が日本で使いたいという企業が現れて、1981年に会社を創る事になりました。そして私は日本で CAD の開発・販売の仕事を始め、現在に繋がっています。

一方、CAD の大きな市場である米国でも私が英国で開発に携わった CAD が、80年代に入り実際の設計業務に使われ始めました。その当時、全米一の公共工事といわれた、ボストン市の Central Artery and Tunnel Project(通称 Big Dig)で、この CAD が



(総会における就任挨拶)

採用されました。それまでボストンの街を分断していた幅の広い高架の自動車道が地下に移されたので、ウォーターフロントから街の中心まで、一体感のある綺麗な街に生まれ変わりました。この大きな図面が弊社内には飾られていましたが、やがて倉庫にしまわれて、そして2、3年前に倉庫のスペースの整理のため、この図面を廃棄することになりました。私としては捨てることが出来ず、思案の結果、自宅のガレージの壁に飾っています。我ながら、良いスペースを見つけたと悦に入っています。(別掲、P-19)

さて、この2、3年はボストンを訪れる機会が増えそうです。それは、MIT Alumni Association of the Term Board Member (2012 July - 2015 June) を仰せつかったからです。四半期毎の会議(3回はMITで、あとの1回は米国各地で行われます)に米国を訪れる予定です。今年は、3月(シカゴでの会議)、4月、6月、9月、12月にMITを訪れる予定です。

これから2年ほど、会長として皆様のお役に立てることを願っております。今後とも、よろしくお願いいたします。

日本ボストン会イベント

お花見の会(目黒川)・・・	4月 6日 (土)	音楽の会(ホームコンサート)	6月 2日(土)
美術と歴史の会・・・	4月 25日 (木)	幹事会・・・	6月 14日(金)
ゴルフの会・・・	4月 25日 (木)	総会・・・	11月 15日(金)

日本ボストン会 20 周年記念式典・パーティ式次第
2012年11月10日(土)

第 1 部 記念式典：14時30分～16時30分

- | | | | |
|---------------------------------|----|-----|------|
| 1. 開会 | 司会 | 副会長 | 藤盛紀明 |
| 2. 挨拶 | | 会長 | 法眼健作 |
| 3. 祝電披露 | | | |
| 4. 会の歩み： | | 副会長 | 土居陽夫 |
| 5. 記念出版報告：「三井寺に眠るフェノロサとビゲロウの物語」 | | 会員 | 山口静一 |
| 6. 記念講演： 「大気汚染の嘘と本当」 | | 顧問 | 吉野耕一 |
| 7. 閉会挨拶 | | 顧問 | 鶴 正登 |

第 2 部 記念パーティー兼総会： 17時～19時30分

- | | | | |
|--------------------|-------|-----|-------|
| 1. 開会 | 司会 | 副会長 | 近藤宣之 |
| 2. 挨拶・乾杯 | | 顧問 | 井口武夫 |
| 3. 歴代会長挨拶：パーティー時随時 | | | |
| 4. 記念グッズ紹介 | | 幹事 | 水野賀弥乃 |
| 5. WG・事務局報告 | | | WG担当者 |
| 6. 会計報告 | | 副会長 | 山崎規矩子 |
| 7. 監査報告 | | 監事 | 篠崎史朗 |
| 8. 新会長選出 | | | |
| 9. 新会長挨拶 | | 会長 | 長島雅則 |
| 10. 男性コーラス | キーボード | 演奏 | 酒巻則子 |
| 11. 女性コーラス | | “ | “ |
| 12. 閉会挨拶 | | 顧問 | 鶴 正登 |
| 一本締め | | 副会長 | 藤盛紀明 |

以上

20周年記念レセプションを担当し

第1部の記念講演から一転して賑やかな第2部となり、司会者としてもなるべく多くの方からご挨拶やご報告をしていただくように努めました。途中で短く切り上げていただくよう、失礼なことも申し上げましたがお許し下さい。

最後はプロの酒巻則子会員の演奏と指導で、皆で歌うと言う盛り上がりもあり、20周年の祝いを楽しめることができました。

副会長 近藤宣之

「ボストンへようこそ」頒布を終了して

ボストン日本人会婦人部が作成し発行した生活ガイドブック、「ボストンへようこそ」を日本国内で20年にわたり頒布してきました。

お蔭さまで好評を博し、合計1,000冊以上をボストン地域へ赴任、留学される方々にお届けしてきました。当会への外部収入ともなり、運営上にも貢献させたことは幸いでした。在庫もなくなりましたので、20周年を機に終了させていただきました。

幹事 近藤百合子

日本ボストン会創立 20 周年記念行事に寄せられたお祝辞

日本ボストン会会長
法眼健作様
同会会員の皆様

この度、日本ボストン会の設立 20 周年にあたり、心よりお慶びを申し上げます。皆様方は、この地と深い関係をお持ちになり、日・ボストン、日米関係の促進に努力されており、深甚なる敬意を表明させていただきます。

日本ボストン会の一層のご発展と皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。

平成 2 4 年 1 1 月 1 0 日
在ボストン日本国総領事
武藤 顕

日本ボストン会の皆様

このたびは日本ボストン会創立 20 周年記念式典の開催、まことにおめでとうございます。

私は昨年一月から先月まで、在ボストンに日本国総領事の職務を勤めておりました。約二十ヶ月間の短い期間ではありましたが、東日本大震災の発生と引きも切らぬ対日支援、日米桜交流百周年、成田・ボストン間の直通便就航等、さまざまな事がございました。

そうした中で折に触れて、ボストンの方々の日本に対する暖かい思いに励まされ、またこれまで積み重ねられてきた彼我の交流の豊かさに感銘を受けました。現在の日本とニューイングランドとの実りある関係は、まさに本日お集まりの皆様方のご尽力によるものであり、改めて心より敬意を表したく存じます。

日・ニューイングランド関係のさらなる進展、日本ボストン会の一層のご発展と会員の皆様のご健勝、ご活躍をお祈り申し上げます。

外務省欧州局参事官 引原毅
(前在ボストン日本国総領事)

日本ボストン会 創立 20 周年 おめでとう御座います。ボストン日本人会の中塚久生と申します。

2012 年が創立 20 周年とのこと、改めておめでとうございます。

我々ボストン日本人会も創立 50 年を超えております。日本ボストン会の皆様の中には日本人会にご尽力された諸先輩の方々がたくさんいらっしゃると思います。この場をお借りして、今迄のご苦勞に感謝したいと思います。

と言いますのが、こう言った NPO 活動をボランティアで継続させるには関係者の一致協力と会員の皆様のご理解があつてのこと。

私は今、日本人会を末永く継続させる責任を強く感じております。皆様のご指導頂きながら、精一杯努力して参る所存で御座います。今後とも宜しくお願い致します。

11. 10. 2012
ボストン日本人会
会長 中塚 久

日本ボストン会の皆様

本日は創立 20 周年記念式典の開催、誠にありがとうございます。

ボストン日本語学校で昨年度から校長をしております中川と申します。本校も 1975 年 6 月に開校して 38 年目を迎え、ここ数年 700 名を超える子どもたちが学んでいます。創立当時から、大変お世話になった皆様も会場にいらっしゃることに存じます。

皆様のご尽力のおかげで、今、子どもたちが本校で学ぶことができます。心より感謝申し上げます。

本校で学ぶ子どもたちが世界中で活躍してくれる日を夢見て、ボストン日本語学校を發展させて参ります。今後とも、変わらぬご支援をよろしく願いいたします。

日本ボストン会のさらなるご発展、会員の皆様のご活躍、ご健勝を祈念しております。

ボストン日本語学校
第 13 代校長 中川 豊巳

日本ボストン会創立 20 周年記念行事に寄せられたお祝辞

THE JAPAN SOCIETY OF BOSTON

From the desk of the Peter M. Grilli — President

October 12, 2012

Dear Member of the Boston Association of Japan

It is a great pleasure to send you congratulation on the twentieth anniversary of the establishment of the Boston Association of Japan (BAJ). Your friends in Boston are delighted that the BAJ exists and that it has reached this milestone in its history.

I very much wish I could be with you in Tokyo on November 10 to attend BAJ's 20th Anniversary Party. However, I have just returned to Boston from several weeks in Japan and it is not possible for me to go back to Japan so soon. I was delighted to meet a number of BAJ members in Tokyo recently, when I gave a talk about the history of the Japan Society at the Harvard Club of Japan.

It is a pleasure to know that all of you retain strong good memories of your personal experiences in Boston and that you share such memories at the regular meetings of the BAJ. Please be assured that we at the Japan Society of Boston enjoy exchanging news and information with you in order to continue strengthening positive ties of friendship between Boston and Japan. Through our mutual efforts, I am certain that the relationship of Boston and Japan will continue to expand and grow ever stronger in the years to come.

Thank you for your friendship, and warmest congratulations again on the occasion of the 20th Anniversary of the Boston Association of Japan!

Yours sincerely,

(signed)

Peter M. Grilli

President

「日本ボストン会創立 20 周年をお祝いして」

日本ボストン会がこのほど創立 20 周年をお迎えになりましたこと、心からお慶びお祝い申し上げます。私共の名古屋ボストン美術館は米国・ボストン美術館の姉妹館として 1999 年に設立以来、日米文化交流の重要拠点の役割を果たすべく活動を続けて参りました。当館では、現在、あたかも「ボストン美術館 日本美術の至宝展」を開催中であります。

すでに東京国立博物館で開催されました東京展でご覧いただいた方も多きことと存じますが、フェノロサ、ビゲローなどが岡倉天心の手を借り、明治 10 年代から収集を始めました優れた多くの日本美術の中から国宝・重要文化財級の名品を選びすぐにご覧に入れる里帰り展であります。ことに曾我肅白の巨大な「雲龍図」は日本初公開であり、言葉に尽くし難い迫力をもって、私たちに日本美術のすごさを再認識させてくれております。おかげさまで名古屋でもすでに 20 万人を超える観客が来館されました。

去る 9 月 24 日にボストン美術館を支える財団の理事会に列席して来ました。日本および当館に寄せていただいている期待と友情の深さをじかに感じて帰って参りました。それに応えられるように、これからも努力してゆきたいと念願いたしておりますので、よろしくお願ひいたします。

学術と共に芸術文化の香り高いボストンに深いかわりをお持ちの皆様方の絆がますます年輪を重ねられますことを心からお祈りしてお祝ひの言葉とさせていただきます。

この度はまことにめでとうございました。

名古屋ボストン美術館 館長 馬場駿吉

日本ボストン会創立 20 周年記念行事報告

日本ボストン会 20 年の歩み

1992年春、ボストン駐在から帰国する時に、当時のボストン日本人会会長の吉野耕一先生から、先に帰国された清水建設の藤盛紀明さんを助けてボストン日本人会と連携する会を日本で立ち上げて欲しいとのお話がありました。同年夏、藤盛さんが呼び掛けられ、米田隆一さん、神部信幸さん、土居が集まり設立の準備を始めました。

同年10月30日に東京工業大学大岡山キャンパスの100年記念館で、55名のご参加を得て日本ボストン会設立準備委員会を開催し、会の設立のご承認を頂き、日本ボストン会はスタートしました。

1993年4月に会報第1号を発行し、同年10月18日に第1回の総会をNEC三田ハウス芝俱樂部にて開催しました。4回の幹事会に加え、「講演と音楽の夕べ」をハーバード大学准教授の柳沢幸雄先生の講演とニューイングランド音楽院大学院を卒業された松岡英子さんのピアノ演奏で行いました。また、ボストン日本人会婦人部編集の「ボストンへようこそ」の販売、年2回の会報の発行を行い、会員数は84家族となりました。

翌1994年には、代表幹事を初代の吉野先生からボストン初代総領事であられた井口武夫大使にバトンタッチされ、「ボストン桜の木植樹10周年」協賛寄附、日露戦争ゆかりのポーツマス・「ウエントワースホテル保存」への寄付を行い、ボストンからの派遣教員のホームステイを会員の酒井一郎さん宅で引き受けて頂きました。会員数は102家族となりました。

1995年にはボストン日本語学校創設20周年募金寄付に協賛し、帰国された会員からの寄付を受け付ける窓口を創設しました。同年秋にはレディーズ会がボストンへのツアーを企画し、20周年記念寄附金を同校に届けました。

その後、年1回の総会、年2回の会報発行、

初代	吉野耕一	1992年10月から。
第2代	井口武夫	1994年11月から。
第3代	藤崎博也	1996年11月から。
第4代	高木政晃	1998年11月から。
第5代	茂木賢三郎	2000年11月から。
第6代	井口武夫	2002年11月から。
第7代	佐々木浩二	2004年11月から。
第8代	鶴 正登	2006年11月から。
第9代	山村 章	2008年11月から。
第10代	鶴 正登	2009年11月から。
第11代	法眼健作	2010年11月から。
第12代	長島雅則	2012年11月から。

ボストン日本人会婦人部の”日本里帰りツアー”の御一行を当会の集いにお招きするとか、岡倉天心六角堂へのツアー、「日本・ニューイングランド交流の記録」の発行、北海道マサチューセッツ協会との懇親、ボストンポップス・エスプラネードオーケストラのコンサート開催、名古屋ボストン美術館訪問等とワーキンググループ主体で各種イベントを行って来ました。昨年も、歌舞伎鑑賞、お花見、弘法山ハイキング、ゴルフ、ジャズコンサート、紅葉狩り、美術と歴史を求め静嘉堂訪問、20周年記念パーティと各種活動を行っています。

また、1908年から1953年までの間にボストン日本人学生が書き継いだ4冊のノートを三好彰幹事が調査し、当会のホーム・ページに報告を載せています。

尚、日本ボストン会の活動は、ホーム・ページ担当の吉田博幹事が纏められた20年分の日本ボストン会活動年表がHPに掲載されています。そちらをご参照いただければ幸いです。

発足以来、会長の任期は2年としてお願いしてきました(別表参照)。今年の総会で会長は12代目の長島雅則さんとなり、会員数は179家族となっています。

土居陽夫 記

日本ボストン会 20 周年記念講演(要旨)

フェノロサとビゲロウ

山口 静一

本誌連載記事を増補し小著『三井寺に眠るフェノロサとビゲロウの物語』を出版させていただきましたが、創立 20 周年記念行事の一環として講演の機会を与えてられましたこと、まことに光栄の至りです。

フェノロサは美術関係のみ喧伝されておりますが、12 年間の在日生活を終えて帰国した時、日本を手本にアメリカ社会を改革しようという抱負を手記に残しています。同胞意識と犠牲的精神、平和と寛容、協調と人類愛に象徴される菩薩の心——これが日本人の特性だと言うのです。いささか面映ゆい感じですが、明治の日本には外国人にそう感じさせるものがあったのでしょうか。或いは強烈な自己主張に貫かれて異民族を排除し続ける西洋を暗に批判したのかもしれませんが。

やがてその熱意は東西融合の思想へと展開し、帰国後 3 年目のシカゴ万博に合わせて刊行された詩集『EAST AND WEST』に結実することになります。その経緯は概ねレジメのとおりです(別項参照)。西洋の男性的力と東洋の女性的な美、これが美術と宗教すなわち美と愛を媒酌人として結婚し一体となった新世界の実現——それがフェノロサの理想でした。

今回の講演では、冒頭ウイリアム・S・ビゲロウの事績を紹介しました。ビゲロウはフェノロサの陰に隠れたように思われた存在でしたが、フェノロサ

の追悼文で岡倉天心が述べているように、フェノロサをして名を成さしめたのは実はビゲロウでした。フェノロサの美術運動を経済的に援助したばかりか、友人ウエルドにフェノロサ蒐集絵画を購入させてボストン美術館(MFA)に遺贈させ、同館に日本美術部を新設して帰国後のフェノロサをキュレーターに着任させたのもビゲロウの斡旋によるものでした。その上MFA理事となって自ら蒐集した数万点にのぼる多様な文化財(絵画、彫刻、刀剣、陶磁器、漆器、根付、衣装、古書籍など)を寄贈し、MFAを世界に冠たる日本美術の宝庫としたのもビゲロウでした。

明治政府はビゲロウに勳 3 等旭日章を授与しました。勳記は日本美術を世界に紹介した功績を称えています。明治の日本人は国際的視野が広がったようで、現在のように文化財を流出させたというような近視眼的な見方をしていません。

フェノロサはスペイン系の二世、モースはメイン州ポートランド出身でしたが、ビゲロウは父ヘンリーがハーバード大学医学部教授で大統領侍医、祖父ジェイコブもハーバードで医学と生物学を教えた医学者でMIT創設に関わったという、生粋の名門ボストニアンでした。ウイリアム・S・ビゲロウこそ日本とボストンを結ぶもっとも重要な人物だったと

いって過言ではないと思います。(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館館長)

日本ボストン会創立 20 周年記念行事(2012 年 11 月 10 日開催)

フェノロサ： 東西融合の思想 (レジメ)

山口 静一

I 1901 年フェノロサ手記 Houghton Library フェノロサ資料 bMS Am1759.2 (60)

ボストン美術館での 5 年間、フェノロサは日本文化・日本美術の宣揚に目覚ましい業績をあげた。美術館就任の翌年すなわち 1891 年 5 月 1 日の日付で、彼は将来の抱負を綴った手記(全 12 章、ノートブック 4 ページ)を書き残している。

自分は極東の古い文化に共感を持ったが、アメリカ人としてアメリカ文化の向上に寄与したい。個性と社会との調和を図り、美術を社会機能の重要な要素たらしめるには自分が最適任であると自負している、

第 12 章梗概

美術家の能力といえども政治的、経済的現実左右されるのは当然で、現実に背馳した美術の発展は考えられぬが、それにしてもアメリカ国民一般の美術的無関心さを黙視することはできない。彼らに適切な美術教育を施し、新しい意識の社会を作り出すことによって、少

フェノロサ：東西融合の思想(つづき)

なくともアメリカの都市や住宅をもっと美的なものにしよう。その規範は日本人の美的感覚にある。それをはぐくんだ日本人の仏教理念——同胞意識と犠牲的精神、平和と寛容、協調と人類愛に象徴される菩薩の心——に学ばなければならない。

II 中国および日本の特徴、Chinese and Japanese Traits, *The Atlantic Monthly* June 1892

結論部分抄訳

…遠い将来中国が軍事的大国に発展しヨーロッパ連合が東方の戦略基地に関心を向けざるを得ぬ時期が到来するかもしれない。しかしそれ以上に可能性の大きいのは、入念に仕上げられた優美さと超俗的な理想と、創造性豊かな個性によってインスピレーションを発揮した日本の完璧な美術品——これが宝船に満載されて西欧の自由市場に侵入し、その靈剣を以って全世界を平和のうちに征服する日の近いことである。

それ故に、理論的にも実際のにも、日本のとるべき最善の道は日本が東洋の伝統の理念をしっかりと保持して行くことだと私は信じている。この道こそ日本が人類に対して果たすべき重大なる任務であり、日本こそこの聖火を守る最後の国である。日本は西洋の仰々しい材料を用いてその炎を再び燃え上がらせようとする一方、西洋文明が迷い込んだ物質主義の幻影を見通す不思議な力を持つ唯一の国である。東洋と西洋という二つの類型の融合を図ることは、2000年前アレキサンダー大王がギリシャの国境をインドに接せしめて以来今や二度目の機会であり、かつていずれの一方も想像しえなかったほどの完成した文明を東西両洋に創り出す可能性を秘めているが、日本こそ我々の最も注目すべき先達者となる測りがたき力をもつ国である・・・。

III 長詩 EAST AND WEST の朗読

ハーバード大、ファイ・ベータ・カッパ (ΦBK) ソサエティにて、June 30, 1892

IV 詩集 EAST AND WEST, THE DISCOVERY OF AMERICA and OTHER POEMS,
Thomas Y. Crowell & Co., New York, October 1893

PREFACE

EAST AND WEST 目次 及び概要

PART I The First Meeting of East and West

アレキサンダー大王の東征による一時的な古代東西文化の融合。両者を代表する二人の天使がそれぞれの辿った運命を語り、再会を約して別れて行く。

PART II The Separated East

フェノロサの霊が亡き狩野芳崖の霊に導かれてインド、西域、中国、と美術遍歴の旅を続け、最後に到達した日本に理想的な社会を見出す。やがて日本の宗教に心惹かれ、亡き桜井敬徳の霊の指導で仏教の世界を探る。

PART III The Separated West

西洋文明発達史の歴史。科学、貿易の進展により西は一方向的に東を求めるが、二人の天使はこれが正しい出会いでないことを語る。

PART IV The Present Meeting of East and West

明治維新後の日本の現状。東は西に圧倒され、西の目的無き物質文明を模倣するばかりであることを批判。

PART V The Future Union of East and West

フェノロサの理想。西洋の男性的な力と東洋の女性的な美とが、美術と宗教の力すなわち美と愛の力を媒酌人として結婚し一体となり、もはや東も西もない涅槃静寂の境地
以上

日本ボストン会 20 周年記念講演会レジメ資料 フェノロサ・ビゲロウ 略年譜 山口静一

西暦	年号	摘	要
1853	嘉永6	2月18日	フェノロサ、マサチューセッツ州セイラムにて生まれる。
1876	明治9	6月	フェノロサ、ハーバード大学大学院修了。
1877	10	6月17日	モース(39歳)来日、9月に東京大学理学部教授に就任。2年間勤務。
1878	11	6月12日	フェノロサ、25歳、リジー(25歳)と結婚、7月20日、サンフランシスコから日本へ。
		8月9日	横浜着、翌10日、東京大学と契約、文学部教授に就任。
1882	15	6月5日	ビゲロウ(32歳)、モースと共に来日。以後8年間、フェノロサと共に美術品収集。
1884	17	11月30日	ビゲロウ宅を赤松連城(43歳)訪問、フェノロサも来訪。仏教対話。
1885	18	6月27日	フェノロサ、仏教ノートを残す。(ハーバード大学ホートンライブラリー所蔵。)
		9月21日	フェノロサとビゲロウ、町田久成(47歳)私邸にて三井寺法明院桜井敬徳(51歳)に受戒。法名、フェノロサ 諦信、ビゲロウ 月心。
		秋	来日中のウエルド、フェノロサの蒐集美術品を買収。のちにMFAに遺贈。
1886	19	8月1日	フェノロサ帝国大学(改称)より文部省・宮内省美術行政官に転職。
		10月2日	フェノロサと岡倉(23歳)、ビゲロウを同伴、美術事情調査のため欧米に1年間出張。
1889	22	12月24日	桜井敬徳(55歳)の示寂。
1890	23	6月	フェノロサ、37歳、契約満了で文部省・宮内省を辞任、翌月家族・ビゲロウと共に帰国。
		7月	ビゲロウMFA理事に就任。
		9月1日	フェノロサMFA美術館の新設日本美術部キュレーターに就任。(5年契約)
1891	24	5月1日	フェノロサ、帰国の抱負をノートに書き残す(ホートンライブラリー蔵)。
1893	26	10月	シカゴ万博に際し長詩『東と西』を発表。
1895	28	9月	フェノロサ、予定の美術品目録完成せず、助手メアリとの関係スキャンダル化し休職。
		10月2日	リジー夫人との離婚が成立。
		12月8日	フェノロサ(42歳)、メアリ(30歳)とニューヨークにて結婚。
1896	29	1月	ニューヨークにて、「浮世絵の巨匠たち」を刊行。
		4月	MFA理事会フェノロサへ無期休職を通告。フェノロサは辞表を送付し、新夫人と欧州へ。
		7月9日	フェノロサとメアリ、英仏を回遊後、横浜に到着。
1898	31	4月	フェノロサ、解説目録『浮世絵展覧会目録緒論』(英文、和文)を刊行。
1900	33	8月17日	フェノロサ夫妻帰国、漢詩・能楽に関する研究成果を纏める。
1901	34	5月14日	フェノロサ夫妻、来日4ヵ月滞在。以降米国にて巡回講師の生活に入る。
1902	35	10月	メアリの実家アラバマ州モービル市郊外にマイホームを新築。
1903	36	3月	フェノロサ、ルーズベルト大統領に招待され、日本の立場擁護の講演を行う(21・27日)。
1908	41	5月1日	フェノロサ、ニューヨーク山中画廊『浮世絵展』目録執筆を終え、ヨーロッパ歴訪に出発。
		9月21日	フェノロサ、ロンドン滞在中に狭心症で急逝、享年55歳、ハイゲート墓地に埋葬された。
		9月26日	訃報はセイラムの新聞に報じられ、翌日、日本の新聞で報道す。
		10月	ビゲロウ、「インガソル講座」に引き続き、ハーバード大学にて仏教講義。
		11月2日	フェノロサの追悼文がハーバード大学クラスメートによって公表される。
		11月29日	フェノロサ追悼法要が上野寛永寺に於いて執り行われた。
1909	42	4月	メアリ、故人の遺骨を日本に改葬したい旨をニューヨークの山中商会に打診。
		9月21日	フェノロサの遺骨は山中商会の手でシベリア鉄道經由敦賀到着、即日三井寺法明院に埋葬される。
		10月	フェノロサの墓碑完成。翌月フェノロサの一周忌法要が法明院にて挙行される。
1910	43	春	メアリ、娘アーウィンを伴い来日。夏、ロンドンに向かい、ハイゲート墓地に記念碑建立
1926	大正15	10月6日	ビゲロウ、76歳で死去。ケンブリジのマウント・オーバン墓地に埋葬される。
1928	昭和 3	2月16日	山中定次郎、ビゲロウの分骨と遺品を携えて横浜に帰着した。
		4月27日	三井寺法明院にビゲロウ墓碑完成。法要と茶会が開催された。
1934	9	12月14日	インド学者ウッズ博士、ビゲロウの仏教研究遺稿を携えて来日。
1935	10	1月14日	ウッズ、天台学受講後、帝国ホテルにて急逝。後に法明院ビゲロウ墓域に記念碑建立。

大気汚染の嘘と本当

顧問 吉野 耕一

はじめに：

過去40年間世間を騒がせた大気汚染の問題で1970年代のオゾン層崩壊を分光学見地から考えてみる。又これらの問題を報道したメディアの取り組みを科学的本質との絡み合いも興味の深い問題です。現在進行している放射能とメディアを比べると、メディアが作り出す一般人に与えた恐怖と同じように、オゾン層崩壊での危険は本当だったのかの疑問を振り返ってみる。

大気を構成している分子：

我々の大気の構成は窒素と酸素で両者の比率は4：1となる。その他沢山の不純物があるが水、オゾン以外は対流層圏内では均一に混じり合っている。地球表面から上空10Kmまでが対流圏と呼ばれ台風など気象現象はこの圏内で起こる。その上が成層圏とよばれ、対流圏との混合は殆どない。

Jet 機が運行されているのは成層圏の下部で、上部にオゾン層があって、オゾンが散在している。超音速JET機の開発が進んだ時、運行されるのが成層圏中部になりオゾン層の中に廃棄ガスを排出してオゾン層を破壊する事が警告された。幸い米国空軍、民間共に開発を断念したが、英仏は開発をすすめ、一部運行されたが、現在は運行を廃棄した。

太陽光と大気の吸収：

太陽光は虹で見られる様に、赤から紫にわたって七色に分かれるとされる。詳しく観測すると、連続的な光のなかに細かい吸収が見られ、これらが一定の規則に従い、この分析が量子力学への発展となる。光の波長では赤から紫へと短くなり、可視部外の短いのは紫外線、長いのが赤外線とよばれる。

波長が短くなると、光のエネルギーが高くなり、大気中の分子を破壊(解離)する。解離に必要な光エネルギーは分子ごとに異なり安定な分子の解離には高いエネルギー又は短い波長の光が必要である。

オゾンは350-250nmの太陽光を吸収してオゾン自身は解離してしまう。250nm以下は酸素分子が吸収して、酸素分子は解離して酸素原子となる。100nm以下は窒素分子の吸収解離で、350nm以下の紫外線は地球表面に達する事はない。

オゾン

大気中分子の中で窒素分子はもっとも安定で、1

00nm以下のエネルギーの高い光が必要である。一方酸素も安定な分子であるが、強い化学反応；酸化で作り出される熱で我々動物の生を支えている。

オゾンは不安定で簡単に他の分子と反応して爆発する事も稀でないし、350-250nm波長の太陽光を吸収して、酸素分子に解離する。この反応が危険な紫外線から我々を守っている。250nm以下の太陽光は酸素分子を解離して酸素原子となり、さらに酸素分子と反応してオゾンが作られ、所謂オゾン層が作られる。当然赤道上空ではほぼ垂直に太陽光照射するので、光は強くオゾン製造も高い。

一方極地上空では、太陽光の照射は平行になるので、光も弱くオゾンの製造にも制限がある。つまりオゾンの製造、破壊は常に進行している。

極地上空でのオゾン層破壊：

太陽光以外でも地表から有害物質がオゾン層に達すればオゾンの破壊が起こる。先に述べた超音速JET機の運行では排気ガスがオゾン層にばら撒かれ、オゾン破壊となる。一方で観測されたオゾン層の穴は地球自転に伴う偏西風が極地では渦巻きになって、地表から有害物質をオゾン層まで運び、オゾン層の破壊が起こったと説明されている。オゾン層で守られていた有害紫外線がオゾン層の穴を通して地表に達して人体に、皮膚癌等の危険をもたらすと言われた。オゾン層を守るために排気ガスの規制が行われ、地球大気汚染が改善されたのは大変結構な事である。

オゾン層崩壊で危険な紫外線が地球表面に達し、皮膚癌発生の危険が報道されたが、その間にどの位の紫外線が地球表面に到達して、どの位の皮膚癌増加については全く報道されていない。

極地では太陽光は水平方向から入射するので、オゾン層の穴と関係なく紫外線はオゾンに吸収される。先に述べたように極地上空でのオゾン製造は少ないので、観測されたオゾン層の穴は、オゾン層の破壊と関係なく只オゾン濃度が極地でのオゾン製造の低さとも考えられる。

終りに：

オゾン層は製造と破壊の両立で存在している。地球大気中に酸素が存在し、太陽光が変わりなく地球に到達する限り、オゾン層がなくなることはない。この二つの条件は人間の存在の為の必要条件でもある。(初代日本ボストン会会長)

日本ボストン会創立 20 周年記念行事報告



第 11 代会長 法眼健作 挨拶



名古屋ボストン美術館祝電披露 (酒井一郎)



第一部 記念式典 参加者



日本ボストン会の歩み 土居陽夫副会長



祝電披露 鶴正登顧問 (第 8 代・10 代会長)



記念出版報告 山口静一会員



ボストン日本協会祝電披露 (関直彦)



記念講演 吉野耕一顧問 (初代会長)

日本ボストン会創立 20 周年記念行事報告



総会 司会 近藤宣之副会長



佐々木浩二顧問 (第7代会長)



井口武夫顧問(第2代・6代会長)



クリアファイル紹介 (水野・松永・法眼)



藤崎博也顧問(第3代会長)



山口静一会員、吉田礼子会員(奈良在住)

(祝電)

創立20周年おめでとうございます。

日本ボストン会が民・官・学関係者の運営で成功したことにお慶びを申し上げます。今後更に日米の友好を深めることを願っています。皆様によろしく。

高木政晃 (第4代会長)

日本ボストン会が創立 20 周年を迎えましたこと、まことにご同慶に存じます。運営にあたられてきた皆様に深い敬意を表すととともに、この「ボストン大好き人間」たちの楽しい集いがますます発展いたしますことを、心から切望しております。

茂木賢三郎 (第5代会長)



矢萩春恵会員

日本ボストン会創立 20 周年記念行事報告



ジャメッツ夫妻 (京都在住)



カラオケの会報告 (鶴)



山の会報告 (幸野・山崎)



会報作成報告 (俣野夫妻)



ゴルフの会報告 (山崎)



美術・歴史の会報告 (三好・篠崎)



音楽の会報告 (関夫妻)



一繕乃会報告 (水野)

日本ボストン会創立 20 周年記念行事報告



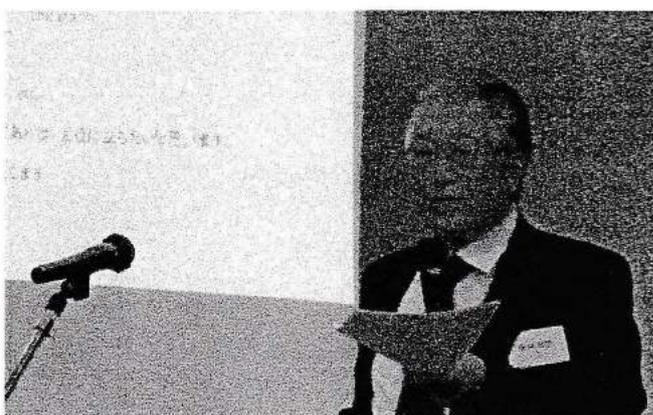
美術・歴史の会報告 (酒井夫妻)



「ボストンへようこそ」報告 (近藤夫人)



お花見の会報告 (生田)



紅葉狩りの会報告(藤盛副会長)



伝統芸の会報告 (吉野夫人・滝沢)



男性コーラス発表 (生田・酒井・鶴・藤盛)



会計・監査報告 (篠崎・山崎夫人)



女性コーラス発表

ボストン・スカイライン・クリアーファイル 松永通子画

2011年12月8日にBAJ20周年行事の打ち合わせを致しました。20周年を記念して何か記念品を作っては如何かと提案を致しましたが、さあ、どうしましょう。あれこれ考え、Tシャツ?マグカップ等?考えましたが、いずれにせよ、ボストンへの想いをどのようにヴィジュアル化し、皆様にとって記念となる品ができるかと、あれこれ思いつめぐらすことは、楽しい悩み事でした。

1988年までお仕事で一緒しておりました松永通子様、ご退職後に画家としてご活躍なさり、いつも個展にお招き頂いております。特に風景画を得意となさっていらして、とりわけ、彼女の生み出す海の色、湖の色等の青色にいつも感動しておりましたので、懐かしのチャールズ・リバーの爽やかな青を「松永ブルー」で描いて頂けたら!と思いつきました。松永様にお願ひ致しましたところ、ご快諾頂きました上に、沢山のボストン風景を描いて下さり、それも、とてもとても楽しんで描いて下さったと伺い、嬉しく、有難く思いました。

沢山描いて頂いた風景画を幹事会でお諮りしたところ、多くのご賛同を得ましたボストン・スカイラインの絵をクリアーファイルにすることに決定いたしました。

ところが、それからがまた悩みどころでした。クリアーファイルを作成するにあたって、業者さんは白地に絵を薦める一方、私は地はクリアーが良いと主張し、専門家の意見と、素人の私の意見ですので、またまた悩み

ました。絶対に期待外れの代物は作成したくないと思い、BAJのご婦人方にも相談致しました。結果、画家の松永様のご意向に託しましょうということになり、松永様にご相談した結果、「勿論クリアー地!」と決定。出来上がったクリアーファイルの包みをドキドキしながら開けましたが、思った通りの仕上がりに、小躍りしました。

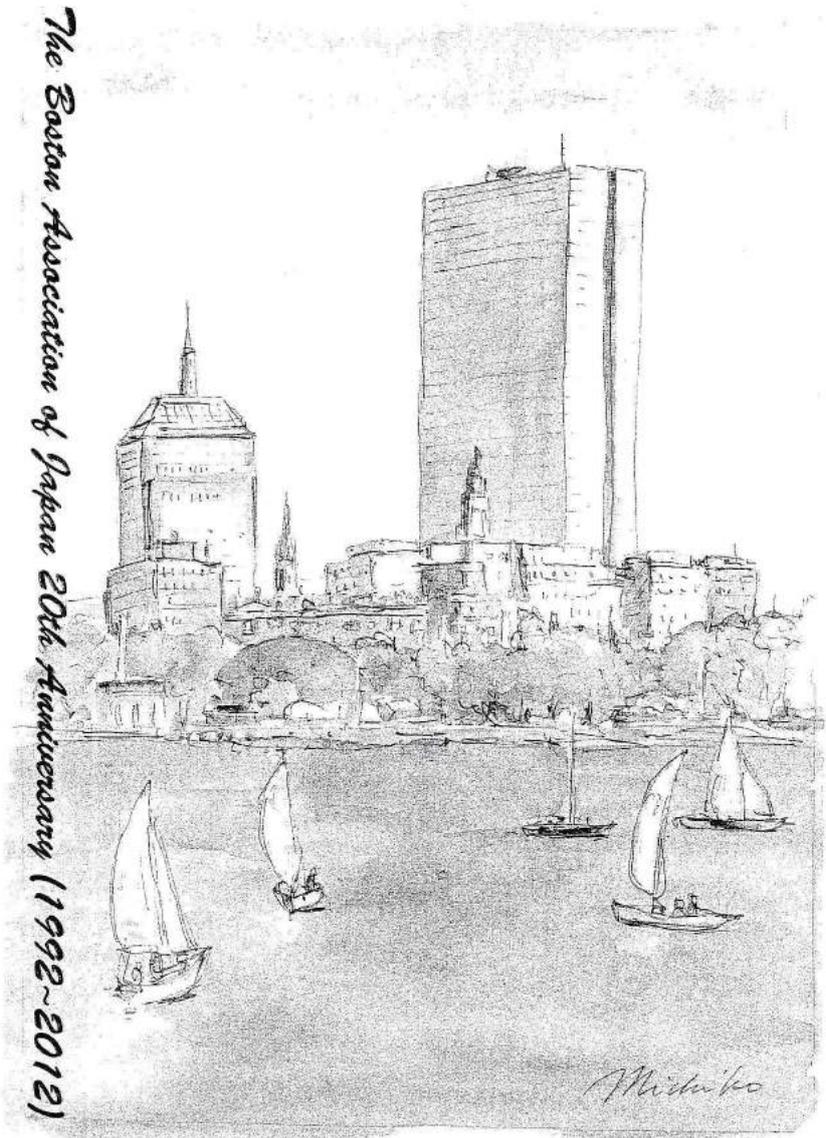
あとは、会員の皆様に喜んでいただけるかが心配でした。でも、どなたにも使って頂けて、邪魔にならず、大切な書類を入れる・・・そんなクリアーファイルが出来上がりましたことを、

とても嬉しく思っております。

20周年記念式典において、無償でこの度の記念品へのご協力を頂きました松永様へ、BAJより感謝の品としてクリアーファイルを50枚贈呈致しました。松永様からは、BAJへお祝い金壹万円を戴きました。後日、松永様はボストンの風景画を絵葉書にもしてくださいました。クリアーファイルはBAJ事務局にございます。3枚千円ですので、是非お求めくださいませ。絵葉書もご希望の方がいらっしゃいましたら、ご連絡くださいませ。

水野 賀弥乃記

The Boston Association of Japan 20th Anniversary (1992~2012)



第9回紅葉狩りの会報告

美ヶ原高原 王ヶ頭、2012年10月13日(土)~14日(日)開催



2012年度の紅葉狩りは吉野耕一先生のご提案により、信州・美ヶ原高原の王ヶ頭ホテルに一泊二日で行くことになりました。

吉野先生は若かりし頃徒歩で訪れ、素晴らしかったと言う印象をお持ちで是非もう一度行ってみたいとのご希望でした。本当に素晴らしいご提案を頂いたと思います。

一泊二日の紅葉狩りは初めてで参加者数が心配でしたが13名の参加希望を頂きました。実は今回の旅行は家内が100%段取りしましたが、旅行の前に急に体調不良となったため、急きょ私が代理幹事となり不安のままの旅になりました。

JRで来られた方々は松本駅東口前の三井有料駐車場前に午後2時集合、出迎えのシャトルバスに乗車しホテルに向かいました。土居夫妻はピーナスライン経由で山本小屋前駐車場に車を止めて徒歩でホテルに向かい、吉野先生ご夫妻はご友人のKlaus夫妻と早めに松本に到着して、市内を見学されました。

バスは午後2時20分に出発、松本市から遙か右手の山の上に見える王ヶ頭の無線中継施設(海拔2,000m)を目指し、浅間温泉・美鈴湖を経て、運転手の説明する道路脇の真由美の木、蓮華つつじ、黄色いカラマツ林の中を抜けて約1時間で国立公園の中にあるホテルに到着しました。マイカーで来る人達はホテル手前の自然保護センターの駐車場までは登れますが、あとは徒歩でホテルに向かうことになります。

途中は紅葉らしきものが見当たらず不安でしたが、美ヶ原の頂上は牧場で、越冬のため農家に戻される牛も残っており、見晴らしの素晴らしいところでした。

標高2034mの頂上からは360度の大パノラマ、太

平洋?、富士山、北アルプス、中央アルプス、南アルプス、日本海?と日本の全てが見渡せるところでした。頂上に無線中継施設が乱立していたのが印象的でした。

夕焼けは筆舌に尽くしがたい美しさとはこの事と言う絶景でした。(でもとても寒かったです)。

夕食後ナイトツアーとなり、満天の星の中、牧場へバスで出かけました。夜になると鹿が放牧の牛のエサを食べに来るとのこと。暗闇に光る鹿の群れは大変興味深いものでした。

翌朝は元気のいい方々は午前5時過ぎに起床、5時半過ぎからホテルの一階のカフェ・ラウンジや、ホテルの外に出て、ご来光を拝むことができました。

午前6時半過ぎに、王ヶ鼻展望台まで案内するモーニングツアー(往復1時間)のバスが手配され、王ヶ鼻から見える360度の大パノラマの眺めで「あれが白馬」「あれが穂高と槍」と大騒ぎでした。

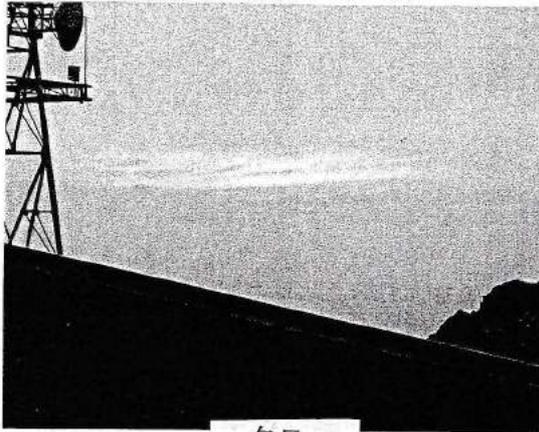
午前8時からの朝食後に記念写真を撮り、午前9時15分頃から約1時間半、宿のお勧めで目的の紅葉狩りに出かけました。岩肌にはりついた紅葉もまたなかなかのものでした。この先の方がもっと素晴らしいと言うことでしたが、時間の関係もあり(本当は草臥れてしまった)、ここで記念写真を撮って引き返しました。

帰路は午前11時15分にホテルのシャトルバスに乗車、午後零時半に松本駅前まで送って貰い、駅前で解散しました。

日本を一望出来るこの場所は是非もう一度、家内や孫達と一緒に来てみたいと思う場所でした。元気があるうちに一泊二日の紅葉狩りも良いものと思った旅でした。

(藤盛紀明 記) (写真 土居陽夫)

美ヶ原高原 王ヶ頭 写真



夕日



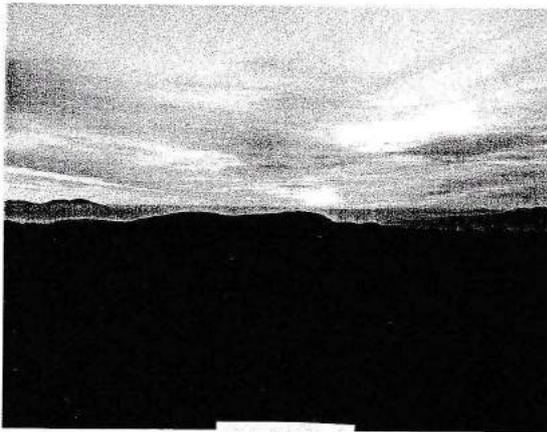
王が鼻 海拔2034m



夕食



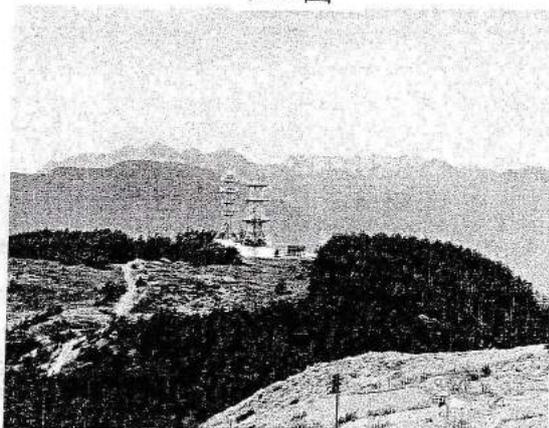
散策 背景に王ヶ頭アンテナ群



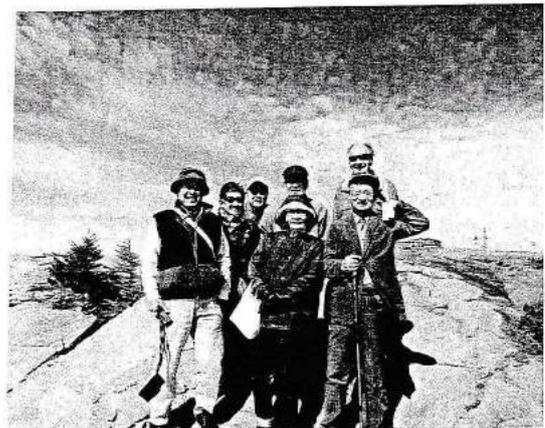
日の出



散策 下方に紅葉を認める



牧場



散策 背景にアンテナ群

伝統芸能の会

歌舞伎観劇会の報告

(国立劇場、2013年1月6日、日曜日、開催)

日本ボストン会茂木賢三郎顧問(元日本ボストン会会長、日本芸術文化振興会理事長)のお世話で、「伝統芸能の会」は国立劇場の新春歌舞伎公演、河竹黙阿弥作「櫓太鼓鳴門吉原」より「夢市男達競(ゆめのいちおとこだてくらべ)」、(尾上菊五郎(=監修)、尾上松緑、尾上菊五郎、中村時蔵 ほか出演)の観劇を致しました。

当日は国立劇場別館の会議室に午前10時15分に参加者は集合、鶴正登顧問から「年明けから円安が期待される新年を迎え、何か良いことがあるのではないかと予感させるので、日本ボストン会及び会員の皆様に良き年になると祈念している」とのご挨拶をいただき、急のご公務が入りご参加できない茂木理事長から参加者へのメッセージが伝えられ、日本芸術文化振興会の北潟様から、歌舞伎の楽しみ方のお話を伺いました。

歌舞伎は出雲に始まった念仏踊りを見せて、布教活動の傍らお寿司を売っていたことに始まると言われていた。語源的には人の目につく衣装を身につけるので「かぶく(傾く)」と言う表現が歌舞伎と称される起源となったと言われている。文献的には1603年に「かぶき踊り」が残されているとのことで、いろいろ経緯があったが、1653年には女性を交えずに男性だけで芝居の興行が認められるようになり、時代の批判も、過去の事柄として荒唐無稽の筋書として演ずることが認められるようになった経緯がある。作者も特定の筋書作家の下に7~8人の書き手が加わり、大筋のもとで、一人ひとりが勝手な筋書を書いて、それを通し狂言として演ぜられることとなったので、余り論理的な筋書に拘らず、最員の役者の演技を楽しめばよいとの、解説を伺った。

この後で昼食を済ませて、正午からの歌舞伎を観劇。午後4時15分に終演、解散したが、都合のつく方々は、舞台裏方の仕組みのご案内を受けて、関係者のご苦勞の一端に触れることができた。

お世話いただいた振興会の関係者に厚く感謝を申し上げます。

(滝沢典之 記)



伝統芸能の会(国立劇場)

二〇一三年一月六日(日)

(敬称略)

写真欠席	小野田淳二	ヒロ高田	朝熊滋之	土居陽夫	生田英機	藤盛紀明	篠崎史朗	光藤昭男
滝沢典之(撮影者)	小野田則子	三好美智子	篠崎和子	土居嘉子	辻 篤子	藤盛富美子	鶴正登	光藤藍
矢萩春恵	吉田静子	吉野静子	三好彰	俣野真由美	俣野善彦	廣瀬智子	鶴 経子	小野通子
	吉田紀子		吉田 博					

美術の会

静物 (パリ、1901) BARCELONA PICASSO 美術館

Picasso(1889-1973)青の時代(1901-1904)に始まる直前の“静物”に Barcelona Picasso 美術館で再会する。

この作品は、1997年初旬 Boston Museum にても展示された“Picasso-The early years 1892-1906”の182作品の一つであった。

ぜいたくな食事を囲み共に食事をする人々の飲ぶが聞こえてくるようだ。魚介類、色を重ねた牡蠣の殻が明るい色合いで描かれている。中央に配された薄いブルー地のコンポート、そこに盛られたオレンジが色鮮やかである。白いテーブルクロスをかけたテーブルの上どころがりんご、ざくろ、トマトの頂点を結べば三角形、この構図は、全体の構図に心地良い安定感を与えている。画面の右手に半分描がかれた器に、ぶどう、オレンジが盛られている。あと半分の器にはどんな果物が？

その器のそばに置かれたフランス ブルターニュ地方のカンペール焼きのビールジョッキに描かれた男の子の姿が愛らしい。画面左側に置かれた花器は力強いタッチで描かれ、単純化された花達が躍るように描かれ背景の青に映えてまぶしさを感じる。その背景の中央の深い青、この青い色こそ、近い将来、Picasso の主流になる単彩色である。

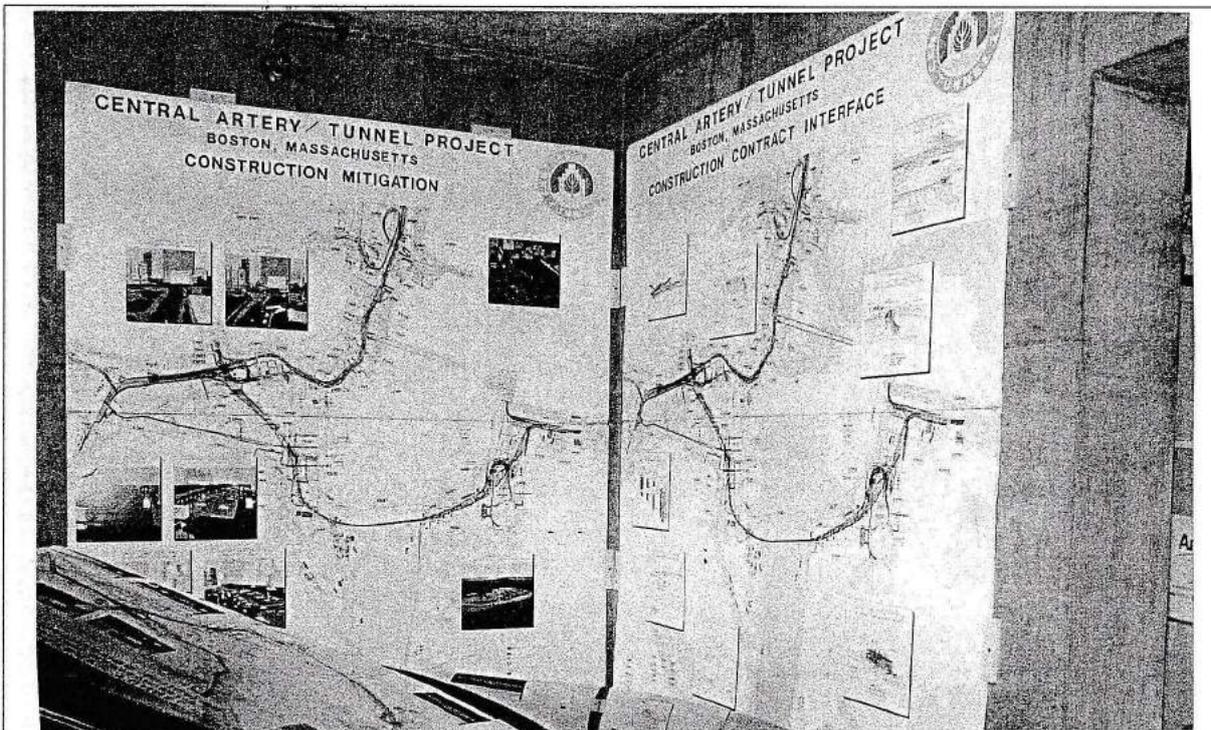


Still Life (1901) 59x78 cm

2012年12月14日、日本を発ち、古代ローマ文明の足跡が残されている芸術の町 Barcelona に向かった。翌日、中世の貴族の館を改築した Picasso 美術館を訪れる。

階下、望楼、ファサードに使用された主な建材は切石、そして切石を使った57cmの厚さの壁、遠い昔と変わらない佇まいの建物、そして歴史を感じさせる中庭、おもわず見とれてしまう。観光客も思いのほか少なく、ゆっくり、夕食までの時間を中世時代の細い道を家族たちと散策する。12/15/2012

酒井 典子



長島雅則氏 所蔵 Central Artery and Tunnel Project 図面 P-1 参照

BOSTON REPORT

From The Japan Society of Boston, 2012-2013

Interesting and exciting events about Japan continue to highlight every year for the members and friends of the Japan Society of Boston and the Japanese Association of Greater Boston. 2012 was the 100th Anniversary of the wonderful 1912 gift of cherry trees from Japan to the United States resulting in the magnificent *sakura* trees blooming at the Tidal Basin in Washington, DC. To celebrate that anniversary, many American cities held ceremonial *sakura* plantings, and at least twenty different locations in the Boston area were enriched by new *sakura* trees. Another highlight of the spring was the first Boston HaruMatsuri or "Japanese Spring Festival," which took place on Sunday, April 29, at Copley Square in central Boston, sponsored by the JSB and the JAGB, with the collaboration of the Consulate General of Japan in Boston. It was a tremendous success: festival organizers had expected about 2,500 people to attend and were amazed when nearly 10,000 participated. Everyone had fun, but it was clear that we needed a larger space for the 2013 HaruMatsuri Festival.

Other highlights of spring 2012 were the Japan Society's Annual Dinner on April 18, 2012. Featured guests that evening included Dr. Kazuo Inamori, the visionary Chairman of Kyocera Corporation, and also Chairman of Japan Airlines. Another celebrity guest was Ms. Wakako Tsuchida, Japan's champion athlete who has won first place in the Boston Wheelchair Marathon for five consecutive years. Two days after the Japan Society's Annual Dinner, Japan Airlines launched its new direct flight service linking Boston and Narita Airports. This non-stop route has made travel between Boston and Japan much easier and more comfortable. The citizens of Boston have responded with great enthusiasm and travel between New England and Japan has increased dramatically during the past year.

In June of 2012, I announced to the Board of Directors of the Japan Society of Boston my intention to step down as President of the Society in June of this year. Many have been surprised by my wish to retire – but they should not be. I have been at the Society for thirteen years, and have loved nearly every minute of my work there. But I have just turned seventy, and I firmly believe that it is time to hand over the Presidency to a younger person, one with more energy and fresher ideas than mine. Only that way will the organization continue to grow in a healthy, positive way. I will continue to live in the Boston area, and wish to remain closely involved with the Japan Society of Boston by working on special major projects. It is an organization of great importance and one for which I hold profound gratitude and affection. But now is the time for me to move on.....

Once again, the autumn brought a change in leadership at the Consulate General of Japan in Boston. Consul General Takeshi Hikiyama, who had worked so successfully on the Cherry Blossom Centennial and many other initiatives, returned to Tokyo to assume the important position of Deputy Director-General of the European Affairs Bureau at the Gaimusho, where he

(前受)

now works closely with Director-General Toyohisa Kozuki, his predecessor as Consul General in Boston. In mid-September, Boston welcomed Mr. Akira Muto as the new Consul General of Japan. In very short order, Mr. Muto established many friendships for Japan in Boston and he quickly became recognized as a valued new member of the New England community. It will be a real pleasure to continue to work with him on the many collaborative projects of the JSB and the Consulate.

In late September 2012, I returned to Tokyo to give a talk at the Harvard Club of Japan on the history of the Japan Society of Boston. The more I delve into that history the more fascinating it becomes. At the Harvard Club event, I was delighted to see many BAJ members in the audience. It is truly heartwarming to be greeted by so many old and new friends wherever I go in Japan.

As all my friends and colleagues in Boston and elsewhere can imagine, my future work will always be closely related to Japan. Even after stepping away from the post of President of the Japan Society of Boston, I intend to remain closely involved and to help the organization whenever I can be of use. I will continue to work on strengthening the sister-city relationship of Kyoto and Boston. I also hope to continue as Chair of the Shigemitsu Global Cultural Council, which is a major project of the JSB, and I will also work on other major JSB projects. We plan to announce some of those projects at our next Annual Dinner, which will take place in Boston on June 6. It will be my "sayonara party," and I hope many of my BAJ friends will be able to attend.

After more than four decades in the field of cultural relations linking Japanese and Americans, I firmly believe that cultural exchange is the fundamental force that keeps our two nations so close and well integrated with each other. Geopolitical issues of great severity or trade issues may challenge the U.S.-Japan relationship from time to time, but it is hard to imagine that such problems will ever shake the fundamental strength of our cultural relationship. Culture depends always on human values, and the *kizuna* or ties that link Japanese and American people are founded on mutual trust and mutual confidence. Thankfully, Japan and America, two of the most influential countries in the world, are strong and steadfast friends. The relationship of our two countries brings to the world community great solidity and confidence that – despite temporal threats and challenges – the future will be stronger and better not only for the people of Japan and the United States but for the entire world.

It has been a privilege for me to serve the JSB and I am deeply grateful for the support of my colleagues there as well as the friendship of hundreds of teachers, mentors and friends who have taught me so much and so greatly enriched my life. Working together over many years, all of us have woven a wondrous tapestry of U.S.-Japan relations. It is that background that convinces me that the future of our two countries will be even richer and more beautiful!

Peter M. Grilli
President, Japan Society of Boston

美術と歴史の会

アメリカからのハナミズキ

三好 彰

あ花見が近づいてくると決まって話題になるのがワシントン・ポトマック河畔のサクラである。東京市長だった尾崎行雄が日米友好を期して贈ったソメイヨシノである。

昨年がその百周年目であり日米関係の多くの場で話題になった。その一例だが、一年前の日本ボストン会の会報にボストン日本協会の理事長であるピーター・M・グリーン氏が次のように紹介された。

This year (2012) we will celebrate the 100th anniversary of the 1912 gift of cherry trees from the people of Japan to the United States. Those original cherry trees have transformed the Potomac Basin in Washington DC into a site of extraordinary beauty. This year, new cherry trees will be planted in many American cities, including Boston, as a symbol of the enduring friendship of Japanese and Americans.

百年前のサクラの心が生きていて、更にボストンを含めた新しい地に広がっていくのは喜ばしい。

さて、このサクラの返礼としてアメリカから東京市にアメリカ・ハナミズキが届けられた。これがこの花が日本に渡来した最初のことであった。

アメリカ・ハナミズキはボストン郊外に自生しており、山野を埋め尽くして美しく咲く。そして遅い当地の春を待ちわびた心に深く染み透る。それを懐かしく思い出される会員は多いことだろう。

さてソメイヨシノの寿命は 60 年前後とされ世代交代りして咲き栄えているが、アメリカ・ハナミズキは長命でありアメリカから来たものが今も元気に育っている。その現存が確認されているのは限られているが、確実なのが東京都立園芸高校(世田谷区深沢五丁目)の構内にある。(下記写真は筆者撮影)



アメリカ・ハナミズキは都内では 4 月の下旬から 5 月の中旬までと桜より比較的長い期間花を楽しむことができる。筆者は昨年の 5 月初旬に同校に見に行った。大きく育った木の枝を覆うようにやさしく白く咲いていた。

この木の下に記念碑がある (筆者撮影)。



この写真では読めないが、日本語と英語で次のように書かれている。

大正元年(1912)、東京市長尾崎行雄(弔堂)がワシントンにサクラを 3000 本贈った。その返礼として、大正 4 年(1915)、ハナミズキ(白花種)40 本が東京市に届いた。その内の 2 本が本校に植えられている。

Hanamizuki (Flowering dogwood)

In 1915, several Hanamizuki were presented to Tokyo by U.S.A. in return for "Sakura (cherry trees)" donated to Washington by Mr. Yukio Ozaki (Mayor of Tokyo). Some of these were planted in our school.

アメリカに贈られたサクラの何本かが同校で育苗された縁もある由である。

同校への行き方はいくつかあるが、筆者は渋谷発等々力行き東急バスを利用した、停留場「園芸高校前」から一足のところである。

学校の受付で事情を話せば見学できる。予約は不要だった。学校なので団体で出かけてにぎやかに花を見るのに必ずしもふさわしくないが、日米交流の記念の樹を静かに愛でるのは一興であろう。

(美術と歴史の会 幹事)

ゴルフ春季懇親会のお知らせ

日本ボストン会の春季ゴルフ懇親会を下記の通り開催いたします。

奮ってご参加いただきたくご案内申し上げます。

1. 開催日：4月25日(木)午前8時47分
第一組インコース スタート
2. 場所：川崎国際生田緑地ゴルフ場
3. プレー代：16,000円、チェックインの時に現金にてお支払下さい。(このゴルフ場はカードが使えません。)
4. 参加費：4,000円、賞品およびプレー後のパーティ代。
5. 申込人数：4組(16人)一杯になり次第締切ります。
6. 申込先：山崎恒

第8回定期ホーム・コンサート

第8回定期ホーム・コンサートを下記のように企画しましたので、新緑香る中、そして梅雨に入る前のひと時をクラシック音楽でお楽しみください。

今回はボストン大学音楽部出身のフルート奏者の辻由記子さん(当コンサートでは初出演)とピアニスト大沼岳彦さん、ニューイングランド音楽院出身のホルン奏者笠原慶昌さんの組み合わせ。楽しく素晴らしい演奏が期待できます。ボストンで研鑽を積んで活躍中の若い演奏家たちを皆で応援しましょう。

演奏の後は、いつもの通りビュッフェ・スタイルの食事とドリンクでご歓談いただきます。

開演前に緑あふれる近所を散策するのも一興。プログラムなどの詳しいお知らせは4月末頃に、改めてeメール/葉書で後日送ります。

(音楽の会幹事：関直彦・尚子)
記

- 日時：6月2日(日)3:00PM 開演
場所：関幹事宅
大田区田園調布4-11-6
出演：笠原慶昌(ホルン)
辻由記子(フルート)
大沼岳彦(ピアノ)
会費：¥5,500(予定)
問合せ：

春の美術・歴史の会開催のご案内

マサチューセッツ州、ボストンの郊外(ボストンから車で3時間)、ウイリアムズタウンにあるクラーク美術館のコレクションの中で、質の高い印象派の絵画(ルノアール、コロー、ミレ、ピサロ、モネなど)59点と出会える展覧会の鑑賞を企画致しました。是非ご参加ください。

1. 日時：4月25日(木)午前10時30分
2. 場所：三菱一号館美術館、入館チケット売り場付近集合。
3. アクセス：JR東京駅・丸の内南口/JR有楽町駅・国際フォーラム口より徒歩5分
4. 入館料：当日券 一般 @¥1,500
5. ランチ・懇談：午後0時半頃より近くのファンシーなレストランを予定。
6. 参加の有無：下記幹事役の一人に4月21日までに連絡願います。
7. 連絡先幹事：

静嘉堂文庫美術館訪問記

昨年11月17日(日)、三菱の創設者岩崎家縁の静嘉堂文庫美術館を訪れ、美術館開館20周年記念の企画展“受け継がれる東洋の至宝パートII 岩崎弥之助のまなざし”を鑑賞し、東京芸術大学佐藤道信氏の記念講演「明治の美術パトロン」を拝聴した。

講演は主として明治政府による法制面での伝統美術工芸品保護政策の解説であったが、フェノロサ・ビゲロウにも言及し、二人の肖像写真を大きく写し出し、“彼等の手によりボストンに渡った美術工芸品は、そこでの素晴らしい保存環境に、さぞかし満足していることだろう”とのコメントがあった。

参加者は11名。

尚、静嘉堂へは田園都市線二子玉川駅より東急コーチバスで「静嘉堂文庫」下車、Tel 03-3700-0007
次回は4月25日(木)、別項記事をご参照のこと。

篠崎史朗 記、写真 吉田博



創立 20 周年記念行事・総会の記録

2012 年 11 月 10 日(土)

場所：NEC 三田ハウス芝倶楽部

出席者： 47 名

遠隔地出席：京都・ジャメンツ夫妻、吉田礼子(奈良)

日本ボストン会の創立 20 周年記念行事は、定刻午後 2 時半から第一部の記念式典を藤盛紀明副会長の司会で開会し、第 2 部の総会は午後 5 時から近藤宣之副会長の司会で開催しました。記念式典では法眼健作会長からは創立 20 周年を祝うお言葉と会員からの支援への謝意を述べられ、尖閣諸島をめぐる日中間の外交摩擦についての見解を披露されました。

本件について(日中間に 1978 年締結の平和友好条約があり)、心配していない。近年、①民主主義が禁じられている国、②個人が保障されていない国、③人権が与えられていない国の政権は存続していない。

中国はパンドラの箱を開けてしまった。中国には、ロコミで日本のことが伝わって行く。米国は 3 原則を世界に伝えてきた。日本が米国と親しい国であることを世界に伝える必要がある。ただ、現状を維持し、経済活動をスローダウンさせ、いつでも引き上げられる用意をしておけば良い。中国で日本企業に雇われている人達は 1,200~1,300 万人いる。彼らはローカルの人の 10 倍の給料を受け取っている。

第 2 部の総会では、井口武夫顧問から 20 周年記念へのお祝いのお言葉をいただき、乾杯の音頭を取っていただきました。懇親の場が進んだところで会計報告・監査報告を受け、ご承認を戴きました。

収入の部： 590,996 円

支出の部： 307,908 円

次期繰越： 283,088 円

「ようこそ」特別会計：1,092,550 円

ボストン会資産： 1,375,638 円

このあと、長島雅則新会長からこれまでのご経歴を語られたあとで、今後の抱負を伺いました。

(新会長のご挨拶、P-1 参照) (俣野善彦 記)

*幹事会：2013 年 1 月 24 日 (木)午後 6 時半開催

観桜会のお知らせ

2013 年度の観桜会は、鶴様のご支援で下記の要領で開催を予定します。ただ、予約しているイタリアンレストランは座席が 16 名 MAX です。申し込み先着順 16 名様に限りの予約になります。(夫婦で経営する小さなお店です)。17 番目以降に参加表明の皆様には当日の食事場所は自己解決していただくことになります。ご了解ください。

今年は少々、散り桜の下を散策することになると思われます。早めの参加登録をお願いします。

記

1. 日時： 4 月 6 日(土)午後 4 時 30 分
2. 集合場所： 東急東横線・地下鉄日比谷線、中目黒駅 中央改札出口(山手通り側道付近)
3. 散策ルート： 目黒川沿いの遊歩道 1km を下流に「目黒新橋」まで 30~1 時間散策。
4. 食事会場： イタリアンレストラン サリータ
電話 03-3493-7879
「目黒新橋」から目黒通り沿いに大鳥神社に向かつて約 50m 歩いた左側。午後 5 時半~7 時半(貸切)
5. 会費(予算): 5,000 円(飲物代込み)当日精算。
6. 花見幹事： 生田 英機

会員の新书推荐

当会の会員である東京慈恵会医科大学名誉教授、大野典也(おおの つねや)さんはがん免疫治療法で、「ヒトの身体をひとつの情報系と見る」という DNA 医学の考え方をベースに成果を上げている医療の状況を纏め、講談社から本年 1 月に上梓されました。

「DNA 医学の最先端

自分の細胞で病気を治す」

講談社現代新書、定価 798 円

関 直彦 記

日本ボストン会会報第 4 1 号 目次

- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1. ご挨拶 (長島雅則会長) 1 頁、 | 11. 伝統芸能の会 (歌舞伎観劇) 18 頁。 |
| 2. 20 周年記念行事写真 2 “、 | 12. 静物、Barcelona Picasso 美術館 . 19”。 |
| 3. 20 周年記念行事式次第 3 “、 | 13. Big Dig 図面 19”。 |
| 4. 20 周年記念行事・お祝辞 4~5 “、 | 14. Boston Report (JSB メッセージ) . 20~21”。 |
| 5. 会の歩み 6 “、 | 15. アメリカからのハナミズキ 22”。 |
| 6. 記念出版報告 (山口静一会員) . 7~9 “、 | 16. 懇親ゴルフ会 23”。 |
| 7. 記念講演 (吉野耕一顧問) 10 “、 | 17. 音楽の会、ホームコンサート 23”。 |
| 8. 20 周年記念行事写真 11~14 “、 | 18. 美術と歴史の会・静嘉堂美術館 . . 23”。 |
| 9. 記念クリア・ファイル絵 15 “、 | 19. 観桜会のお知らせ 24”。 |
| 10. 紅葉狩り(美ヶ原高原 王ヶ頭) . 16~17 “、 | 20. 総会・幹事会の記録 24”。 |